學問の方法としてのリアリズム：「知の Reality を成立させる場所」の構築について *

村田康常・塩谷　賢・浦井　憲

Abstract Realism for Social Sciences（以後 RFSS）というテーマに則して、本稿が取り扱うのは「**學の構え**」を根源的な「リアリティ」として扱う RFSS の「（どこまでも）動的」な側面である。現状の科学、そして本来の学問ということに向け、RFSS はいかなる意味を持ち、また何を主張しているのか。我々は、まず (1)「見たくない、あるいは見えていないもの（こと）から目を逸らさない」という、凡そ「リアリズム」のその最も広い意味を通じて、今日の**科学哲学**に向けて新たな、もしくは別様の基礎の可能性を示唆する。加えて、(2) 主語・対象的に構築される論理に対する、いわゆる**「場所的」な論理**ということについて、その基礎を「状態間の移行としての動態性の把握への批判」すなわち「対象・状態」から「行為・作用」としての把握として提起する。また、それらを通じて (3) 学問と倫理、とりわけ**カント的実践理性**ということについての統合的視座を、提供したい。

1 Introduction

「自由と自己責任において対象化とその制御を行う理性」に基づく**科学と文明**、「個人レベルでの世界へのコミットメント」の体制としての**自由主義**、「自己内に真理を見出す探究」者とその権利としての**人間**および**人権**といった概念に特徴付けられた「**近代**」。そしてそれらの機能的・手続き的な無際限の伸長によ

村田康常
名古屋柳城女子大学 e-mail: murata@ryujo.ac.jp

塩谷　賢
早稲田大学 e-mail: saltcat@bc4.so-net.ne.jp

浦井　憲
大阪大学大学院経済学研究科 e-mail: urai@econ.osaka-u.ac.jp

* 本稿は現時点 2023.8.11 における、Springer Nature 出版予定の英語書籍 *Realism for Social Sciences*, Urai-Katsuragi-Takeuchi ed. (2023) 第 5 章内容の、日本語版に相当するものである。

る啓蒙が頂点を極めた 20 世紀という時代を経て、今日我々が世界において共有し直面している多くの現実的課題および諸問題が存在している。それらは、既に前世紀までにも十分に意識され、また近代自我と社会の相互進展において漸近的にも克服されようとしてきたテーマ、信仰やイデオロギーの対立による国際紛争、産業発展にともなう環境破壊、あるいは差別に起因する貧困といったものを含みつつ、同時に「近代」の特徴づけそのものに由来しあるいはその「進歩」により成長させられた、一層新たな、かつ深刻な意味での難題として、今日の我々に向け、改めて突き付けられているようにも思われる。

戦争が、**民主化**という大義をまといつつ、あるいは 9.11 以降のテロとの闘い、非人道的な兵器の根絶といった、何かもっともらしい理由付けとともに、延々と繰り返されている。今日そうした言葉を使用することが、紛争当事国のみならず、その外側の諸国の、軍事およびその関連産業の成り立ちに無関係であるとは、誰も思わないであろう。近年の**パンデミック、地球温暖化、SDGs** といった掛け声と同時に、そこにおける**科学と産業**、そして**政治**との関係を見るならば、その理念・理想として語られる表側と、そして現実的には多くの問題が取り残され繁茂するにまかせたままの裏面との乖離は、ますます大きくなるばかりである。今日において、現実社会に強く影響するのは、情報を支配する**ビッグテック**のような、既に国家よりも広範な存在となった諸企業の巨大な連関であり、また**エネルギー、食品、製薬**といった生命の基盤を統制する世界的流通であり、そして実体経済の何十倍の資産の行き来によって未来までカバーする均衡をもたらすとされる膨大な金融市場ネットワークとそこでの国際金融資本、**投資銀行**といったプレイヤー達である。そしてそのような現実的社会に「棲み込む」中、またそういう世界を「棲み込ませている」我々が、本当に唯一正しいものといったことを、健全に、模索し得るなどということが、既に空想に過ぎないということも、もはや明白なこととなりつつある。

科学技術、ひいては我々の最も重要な知のあり方の現実の姿というものが、社会の成り立ちに（大きく）規定されてしまうということについては、核開発などの軍事関連技術、社会体制の要求に応じざるを得ない制度的教育といったことを考えれば、前世紀から大きな問題と認識されて来たところである。しかしながら前世紀においてそれらはまだ、国家という上からの統制によって統合可能なツリー（樹）状の問題として整理可能であったかもしれない。今日我々が直面しているのは、そうした統制による統合とグローバルな「資本」、「産業」という、社会における分散した横のつながりを通じた一層の開けとの間の**リゾーム（地下茎）的**な相互作用である。原子力は、エネルギー生産の配分と調整に関わる諸産業、エネルギー消費者としての一般市民生活、経済的政治的装置として利用する軍産複合体、放射能という自然物としての特性に由来する食の安全、医療、等々の様々な横断的関連、そしてそこにまた、それらの配分と移動を縦方向から管理すべく国家と国家の力関係が加わる。**3.11 フクシマ**の問題は、そのように複雑に縺れ、限定され尽くせない「社会」での変化への「**参与**」ということを通じながら、そこで「**使用**される知」という問題を、今日の世界の成り立ちの中で提起しているのである。とはいえ、今日膨大な資金フローやネットで広まる匿名の意見、複雑な動きと調整を要する物流、複数の国家と異なる法律や調整されていない様々な条約といった様々な形態が個々の人間のなす集団以外のプレイヤーとして加わっている社会と世界の成り立ちの中では、そのような社会における「**知**」の**参与**と**使用**に向けて、極めて大きな

「**設計的**」統制が存在し得ること、またそのような統制が情報技術の進展などのシステムの発展により実行可能となっていること、そしてそれが個人的な理性による把握を凌駕しつつあることは、否定し難い事柄である。故に事実として今日における近代個人的理性に基づく「知」は、貧富格差の拡大、膨大な政治資金に操作される議会、民主主義の下でのヘイトと**分断**、そうしたことに、ほぼなす術を失っているかのようである。

我々は、そもそも**根本から間違っている**のかもしれない。間違えるしかない宿命にあるのかもしれない。しかし、もしそうだとすれば、**學問**とは、何のためにあるのだろうか。ここで少し考えてみるべきなのは、今日の社会の成り立ち、科学技術あるいは企業文明といったものが、本当の、真の「知に向けられた姿勢、構え（もしもあるとすれば)」、ということにまで、影響を与えているとこれまで我々が想定してきた歴史的・解釈学的条件ということについて、幾分の**余地（隙間・アソビ）**新たな展望の試みを、与えてみるということである。

もちろん、そのような余地は、我々がこれまで思考という行為を成立させるに当たって根本的な、いわば「**避けがたい契機**」と見なしてきた前提の幾分かとの引き換えに、得られるものでなければならない。そして、そのような契機の下、社会の構成ということと知の（少なくとも対象レベルでの）成立と維持が、相互に依存し、規定し、主張し合っているならば、そこでは、従来当然だと受けいれて来たような唯一の理想、一方向への前進と進歩、明確な正誤あるいは善悪といった二元論では捉えることのできない、まさに**汲み尽くすことのできない**「実在」と「知」との関わり・相互嵌入こそ、新たな展望の導き手（問い）となって表出して来ていると、捉えることができる。

我々の「知」的活動は、まさにそのような導きの「**問い**」を、尽きることなく湧出させることを通じて、むしろ「より良い、次なる、問い」を求めつつ、真の知に直接肉薄するのではなく実在と知の相互嵌入の自由な戯れをいわば「**囲い込み育む**」こととして、その意義を見出すことができるのではないだろうか。そうした「姿勢」には、言うまでもなく唯一無二という保証は無いかもしれないが、我々にとってはそれを一つの「**歴史**」性として、踏まえながら、受け入れられるものなのではないか。否、明らかに、そのように受け入れるべきものであるように思われる。

學問ということ、即ち「**真の知**」ということを追求する立場というものが、このような意味で成立しているということについて、その主張と詳細な議論を展開することが本稿の目的である。

RFSS 社会科学のためのリアリズムということにおいては、少なくともその「**動き**（運動)」を与えるものが、こうした「学問」の「姿勢」の成立の上でのみ成立するものとする必要性は、必ずしも無いであろう。しかし、その「動き」の「**制御**」と、「学問」という「**姿勢**」（＝立場）について、その整合性（すなわち**場**の「成立」ということ[2]）を明らかにしておくということは、そのような必要性そのものの本質の探究とは別に、必要性の具体的な顕現へのアクセスの営みとして重要なことである。これを厳密に論ずるとすれば、おそらくそれは広義の「科学の方法論」ということになるであろう。すなわち本章の議論は、RFSS の「學問の方法」としての位置付け（RFSS から来る「**學問の方法**」と

[2] 例えば、言語行為論 speech act theory において発語内の力 illocutionary force がなす場を示す具体的な言語行為（約束、命令、主張 etc.）のような。

いうことであり、同時に「學問の方法」から見た RFSS とは何であるのかということ）を、明らかにすることであるとも言える。

２節では、RFSS を語るに当たっての、リアリズムの意味を明確にする。３節では、具体性を置き違えることの三層について取り扱う。これは後節の議論を推し進めるにあたってその重要な道具を準備する。４節は、従来の科学論・分析哲学との関係を述べつつ、知のアリティを成立させる「場」としての学問の方法ということが、一つの構え、an attitude として整理される。５節では、そのような「場」としての学問の方法ということが、実際には「社会」ということを通じて、制御されるということが扱われる。これは理性というものの虚焦点・シェマ的な把握という議論でもある。６節では、まとめとして、その今日的意義が述べられる。

2 ここでのリアリズムとはどのような立場を指しているのか

我々は、**リアリズム** Realism ということを通じて、これからの「学問の方法」すなわち「知」を求める我々のあり方の、指針を与えようとするのが RFSS という試みであると考えている。そうであるとするならば、それは、専門化され細分化された今日の「科学」諸分野が重層的・立体的かつ綜合的に協働するということに向けて[3]、可能な限り広い枠組みを、提供しようとするものでなければならないであろう。そのことに先立って、まずここでは**実在性** Reality ということをどのように捉えるか、そのことから明確にせねばならない。

ここでの実在性とは、少なくとも知によって対象化されたもの（だけ）を指すのではなく、知による対象化で照明をうけるものとの関わりの中、知そのものが世界に棲み込んでいる様態を含んだもの、いうなれば「**作用と不可分に接合**（あるいは融合）された**構え**」のようなものである。例えば、知識と知識によって**対象化**されるものとの間の最も単純な関係として、習慣的（反射的）な行動におけるものが考えられる。そのような場合、その関係が極めて直接的であっても、やはり「反射」であるが故の「ズレ・隙間」が（その「重なり」と同様に）そこには存在している。より複雑な関係としては、楽曲（楽譜）とその演奏のように、一つのルールに基づきながらも、知識がそのような「隙間」を合成するような関係が考えられる。このような合成は、演奏というレイヤーにおいても、必然的に「隙間」と「**（演奏の）余地**」を伴うことになる。最も複雑な関係（知識とその対象との関係）では、（ウィトゲンシュタインの**言語ゲーム**のように）ゲームが進行するにつれて自分自身のルールを作っていくような場合を含めて、知識と知識の対象がありとあらゆるレベルや層で相互浸透の下にある状況を考えることができる。このような場合、ゲームとして、その関係は、様々なレベルや層での遊びのための「隙間」や（あらかじめ予想された）余地を超えて、社会における（種々の）「**参加**」に開かれている。私たちが（広義の）「リアリティ」として捉えようとしているのは、対象そのもので

[3] 今日、そういった異なる科学的 discipline 間における協働は、人間の具体的な活動や出版・情報ネットワークによる資源としての知識の伝播と社会や企業などでの使用・評価、AI 等による機会的処理などの様々なレベルとスケールにおいて、可能となっている。

はなく、そのような様々なレベルや層の「あそび（隙間／余地）」をもって、知識が対象を「**囲い込もう**とする」「**構え**」なのである。

いわゆる観念論と実在論の対立は、後者が対象化されたモードからの理解内容（規定できないという否定的な規定性も含めて）に依拠し、前者は回帰する知の部分に中心化することで、確実性を担うようにみえる明示的な本質化を志向したものと言えるであろう[4]。

このような分離を避けるために、**主客未分**（現象学的なスタンス）あるいは原体験や前理解（**純粋経験**）といった方法もあるが、それらは背後もしくはメタなレベルで依然として対象化を前提とした状態志向的な傾向を示している試みであることが多いように見受けられると言わざるを得ない。[5]

ここで RFSS という立場とともに主張する実在性とは、そういう「状態」ではなく、むしろ運動・行為・力といった方向から、分離を横断する形での「構え（姿勢）」の把握を考えたものである。運動・行為・力、といったものは、通常、「状態」間の関係として把握されている。しかし、ここでの立場は、そのような把握に対して逆転的な捉え方であり、むしろ運動・行為・力によって「状態」が立ち現せられる、状態の存在という「**潜在**」から状態の現存在 Dasein という「**顕在**」へ**向かう**ものとして[6]、実在性（の部分的照明）を、与えようとしているのである。まさにこのような一人称的側面、つまり状態の現存在の（動的な到来の）場である私としての Dasein の関わりが、ここでの「知」の方法の重要な契機（の一つ）となって入り込むことになる。

なお、この「潜在」から「顕在」への動きは、変化の始状態と終状態の両方に（メタ的に）同時に起こるもので、未定の未来が既定の過去になるという、対象領域での時間性とは区別されねばならない。対象領域での時間性は、メタ的な「潜在」から「顕在」を概念という方向に射影する極限的な操作にともなって（学知ということにおいては普遍的、あるいは避け難い契機ということ

---

[4] 物質主義、および様々な観念論との対比で述べられる実在論の立場のみならず、ここでは観念論対実在論の対立をも包摂しようとしている。実在を言語の使用と共有の問題に帰着させようとする社会存在論（例えば Searle 1996 のような）、直接的な経験を実在ということに基礎づけて科学的認識と真理に先行させようとする最近のリアリズム（Ferraris 2015 等を見よ）、にもそのような横断的傾向は見ることができる。ただし、RFSS は言語的概念として実在を定義しようとする立場ではないし、認識および真理ということを放棄して、実在を主張しようとする立場でもない。むしろ我々が一部をなしている実在から我々へ示される帰結を通して実在に寄り添って行こうとするものともいいうるであろう。（RFSS の Springer 書籍 Urai et al. (2023) の第 1 章では Bhaskar (1997) および Lawson (1997) に基づいた Canbridge 流の社会存在論が取り扱われている。これは上述した Searle の純粋言語的なものよりも幾分深い現実世界との関係に根差したところがあり、本稿における RFSS の議論とより整合的なものと言える。）

[5] 分析哲学の流れで実在論を語るならば、クワインが「何があるのか」（Quine 1953）に於いて物理主義的スタンスと現象学的スタンスを（数学的な表記を介することで）同値なものとして挙げたこと、またパトナムが形而上学的実在論からダイレクトリアリズムに向けた変遷を辿ったこと（Putnam 1983, Putnam 1995）なども、上記のような文脈において、捉えることができるであろう。ダイレクトな経験に関しては、カント (1787) における経験の捉え方と、物自体（Ding an sich）という考え方、あるいはライプニッツのモナド等も、想起される。しかしながらこれらもまた、実在の「汲み尽くせなさ inexhaustibility」ということを、あくまでも対象物的 object-oriented（状態志向的 state-oriented）な極限へと持ち込むことに、起因したものと言える。

[6] ハイデガー (1927) のそれは近代個人理性との関係で人間の実存という局面を探究の端緒に据えたと考えることができるだろう。

にまつわる道具として）すべてを含む状態の想定という普遍的投影面に対象化したところに動態性の純粋なコード化として生ずるものと考えられる。この対象化に於いて、「潜在」は特定の指示対象（いわゆる変化の当体）を持つかのように印象付けられるのである[7]。RFSS の**実在性** (actuality/reality) に向けた立場としてここで主張しようとするものは、そうではなく、それ（実在性ということ）があくまでも（何処までも）不定の量化作用の**虚焦点・シェマティック** (imaginary-focused/schematic) な表現を通したものとして、その（実在ということの）対象化を捉えるということである。そのことを通じて、この立場の（いわば、どこまでも真面目な）「ゆる」さ（余地・隙間）、（真面目さを従来の状態的把握への関連性として言うならば）概念に沿った射影作用の方向の遊動と射影面の配置の不定的多様さということを、示そうとするものである。

従って、リアリズム、実在性という言葉に、ここではその（通常の）対象（状態）性に直接起因する差異には依存せず、その対象という焦点化との関わりとして潜在性においても関連し得る帰結や由来といったものも含めて、できる限り広い意味合いを持たせようとしている。少なくともそれは、今日様々な水準で語られる Idealisms と対置されるような種々の実在論（Realisms 場合によっては、物理主義、唯物論、社会科学における現実主義といった立場までをも含めて）に通底するところのもの、である。

対象化を不定の量化作用 (indefinite quantification process) の虚焦点・シェマ的なものとして捉えるということは、とりわけ学知における追求、といったことと合わせて実在ということを考える場合には、しばしば「**実在の汲み尽くせなさ** (inexhaustibility)」と「多様で**自由** (self-reliant) な進展」とも言い換えることができるであろう。例えば、学知におけるこうした（量化）作用の代表として、数学における公理主義、理論の形式化といったことを考えるならば、タルスキーの真理定義不可能性、ゲーデル補題（例えば Kunen 1980 等を見よ）等の意味するところは、そうした作用が何処までも「不定」であることの、そして様々な異なる顕在化を許容することの数学での実践的な例証となっていると考えられる。このように学知ということ、「実在の汲み尽くせなさ」と「多様で自由な進展」といったことを通した上で、ここでのリアリズムということの意義を、最も平たく言うならば、良く分からなくて見えていないもの、見たくないから見ていないもの、当然すぎて見えなくなっているもの、等々、見えないものから（本当の学知であれば）目を逸らすべきではない、むしろ群盲よ象をなでよ、そのなでることそのものに互いの知とその繋がりを見出せ、という公案のような問いかけをなすということである[8]。

---

[7] 中世の普遍論争における（対象的な）実在論側の立場は、これに近いのではないかと思われる。

[8] 「学知」ということに絡めて、このように self-reliance という意味での「自由」をその根底に置く捉え方は、例えば Inoki (2016) が、大学の存在価値について、それを「知ることそれ自体を求める自由」と位置付けたことに、近いと言えるかもしれない。

3 近代科学と知の成立にまつわる問題点について（具体性置き違えの三つの層）

前節では、我々が、「知」と「知の対象」との関係性として、すなわち知識が対象を「囲い込もう」とする「構え」として、「リアリティ」を捉えようとしているということについて述べた。ここでは、そのことを、ホワイトヘッドによる「具体性の置き間違え」(Whitehead 1929) ということに関連付け、「知の成立」を考える上で基本的な（自然でありかつ避け難い）道具となる「三つの層」ということについて、その定義を与える。

ホワイトヘッドにおいて「具体性を置き間違える」ということを、我々のここまでの表現で言うと、およそ次のようなことになるであろう。「知」が「知の対象」として「対象世界」に措定しているところのものは、それは本来「知」が「知の対象」としてそれを捉えようとするその仕方そのものと、一体化したものである。しかし、それにも関わらず、そのような「対象物」としての「状態」性が、独立に、固定されてしまうならば、「潜在」としての「状態」の「存在 being」からその「顕在」へと向かうものとしての「実在性」、即ち、ここで我々が捉えようとしている（少なくとも部分的照射としての）「リアリティ」から、我々は遠ざけられてしまうことになる。

ホワイトヘッドは、その思弁哲学の構築という目的から、この「置き間違え」を極めて根本的な「誤謬」と位置付けたが、我々はそれを（もちろん誤謬には違いないのだが）「誤謬」と位置付けるよりも、むしろ「知」のはたらきにおける一つの**根源的な「契機」** moment (motif/occasion) として、**新たな「問い」へのきっかけ（自然かつ必然となる自己横断的開裂）**として、**「学知」の「方法」の基礎**に、位置付けようとしている[9]。

「知」が「知の対象」に向けて働くにあたって、我々は「概念的（**概念という方向への**）**射影操作**による対象化」という幾分数学的な言い回しを用いて来た[10]。この表現を継続して用いるならば、「具体性の置き間違え」ということには、その射影の定義域および値域についての拡がり、ということが、その「間違い」の三層性ということの定義と、密接に関わる。第一層とは、（歴史性をもって）すでに対象化された個々のものたちのその本来である何かから、今現在の対象物たちから成る世界への射影（という置き間違い）が定める層である。第二層とは、対象化「可能」なものたちの、その可能性を提供する「手段」のレベルに向けられた射影（という置き間違い）が定める層である。そして第三層とは、概念化という行いそのものの及ぶ範囲（つまり「知」が「対象」に向けて考えるということそのもの）全てに及んだ射影（というレベルの置き間違い）が、定めるものと言える。もちろん学知が概念化をその手段とする限り、確実である内容の存在を保持するように思える「特定の対象」を、内容の明示化・詳細化の前提として措定するのは、自然で有用なこと（であり「**避け難い**

---

[9] ホワイトヘッドがまさにそれらの誤謬を克服する彼の思弁哲学を構築したことに対して、我々の「リアリズム」(RFSS) という試みは、今日の「科学」という「歴史」の上で、「学知」ということに問題を焦点化することによって、同じテーマを「科学の方法」ということに、展開し直したもの、と言えるかもしれない。

[10] 数学的言い回しについては、今日の歴史的条件において、学知に共通の基本的「論理」手段を提供する道具として、極めて避け難いところに、本稿の用語は、厳選され止められている。

契機 inevitable moment (motif/occasion) 」でもあるということ）と言わねばならない。

対象化されたもの　⊂　対象化の手段　⊂　対象化の及ぶ全て

しかし、思考することが世界に**棲み込んだ** dwell in（各々の「わたし」たちの）動きであり作用であるなら、そのような「特定の対象」は**虚焦点・シェマティック**なものでしか有り得ない[11]。従って、三層は、その限りでの世界の捉え方の緩さ、room としての遊び、またシェマの実現という（ある楽曲を、あるいは特定の戦略手段を、奏でるような）意味での play としての遊び、役目を演じ、習慣・掟を実現するということでの game としての遊びに繋がる。（Fig.1 参照。）このように、「わたし（の棲み込み）」との関わりを通じて出てくる三層と、そ

Fig. 1 三層図

の隙間・アソビは、これまで何度か述べてきた「実在」の「汲み尽くせなさ」ということと深く関わる。そして「知」と「知の対象」のズレとして、「わたし」の「世界」に向けての「棲み込む仕方」が、従って「特定の対象」に向けての「わたし」の「構え」が、そもそもシェマ的なものでしかありえないことを基礎として、考えられている。そして、何度も述べるように、「知」は「知の対象」に向けられた「捉え方」という作用そのものと一体化したものであり、その意味で「我々はそもそも根本から間違っているのかもしれない」ということ（そうした「問い」）が、我々に「学知」というレベルでのシェマ的な取り扱いを、余儀なくさせているのである。

以後、４節、５節の目的は、これらのことが、いかに**リアリズムと学知の方法**ということに結びついていくかを明らかにすることにある。第一層、第二層にある、隙間とアソビをいわば第三層においてどのように「真面目に遊ぶ」か。ここで「真面目」とは、**学問的に「問い」になるということ**として、その**最も「緩やかな」規律**を、定めようとしている。それがまさしく本稿での「学知」（とその方法ということ）に向けての焦点化であり、學知とは何か、という問いの根源性でもある。

「遊び」は**「余地・シェマ的な緩さを見逃さない真面目さ」**と結びつくものと捉えることによって、本章のテーマである「学知のための方法としてのリアリズム」ということに、つながる。実際、ここで述べられた、具体性を置き違える３つの層は、とりわけ第三層においては**知の可能性そのものの肯定的な受**

[11] これは、本節末の Discussion 3 および次節で扱われる Quine (1953) の “Two Dogmas” ということ、Putnam (2002) の “Epistemic Value” その他、数学的には Tarski の真理定義不可能性、ゲーデルの補題といったものが、単純に an attitude の下でさえ、その厳密な表現となり得るであろう。

容と繋がるという深刻な「間違い（自己開裂・新たな問いの契機）」であり、そしてそのような「間違い」を見逃さないということを、リアリズムということがなす真の問いかけとして、次節以降においては明確に（学問の方法として）位置付けたい[12]。そのために、「知ること」のリアリティというべきものを（いわば）「**囲い込む**」道具として、また従来の科学論との対比をもって（いわばそれを道具として）、この「三層」は、改めて整理し直される。

以上が、本稿で「知」を捉えるための「三層」という道具と、学知の方法ということに向けられた、その意義であるが、本節を閉じる前に、いくつかの拡張的な議論と、従来の他の議論との関係性などについて、簡単に数点の議論を、オープンにしておきたい。

Discussion 1（「三層」の役割と「緩やかさ」の意義） ここでは、学知の方法ということを考えるにあたって、できる限り「緩やかな規律」を、与えようとしていると述べた。すなわち、遊びの「三層」において、各層でどのような遊びが、遊びとして行われているかといった、それは整理のための類型の分離でなく（もちろんそういうものとして使うこともできるであろうが、そうではなく）、各層での捉え方の「重層的な重なり」あるいは、様々な遊びの同時実現において、遊びと「遊びの外の世界との繋がり」、および遊びがまたその世界の一部でもあることで様々に「自己回帰」すること、が重視されている。従って、上記「緩やかさ」は、そうした「遊び」が、それぞれに特定の価値性というあり方を開くこと、再び外の世界との関りで価値性の間の流動的な関わり合いが、虚焦点・シェマ的な実在の捉え方の流動性によって（あるいは則して）世界の在り方の諸契機に組み入れられていることに、回帰すると言える。もちろん、この部分は価値性のポジティブ・ネガティブという極性ならびに価値と価値の関係性を通じて、その軸性がズレていくことなども考えるべきであろうが、ここでは、ポジティブさについては、方向での増大ということ、それも、必ずしも整合的な統合ではなく、情感的・評価的な圧力・強度として、幸福や望ましい結果への指向・期待が結び付いているといったことを、指摘しておくにとどめる。もちろん、思想におけるそうした多様性は、**学問的立場としての「どこまでも問う」**ということと整合的であり、そしてまたここでの**リアリズムとしての「目を逸らさない」**といったことに、究極的に回帰している。

Discussion 2（動的実存と「囲い込み」） 上に述べた「三層の意義」と「（方法としての）緩やかさ」ということは、「目を逸らさない」リアリズム（経験としての動的実存）に回帰し、「どこまでも問う」学問的立場としての（真理を求める動的実存としての）真面目さにも回帰するが、同時に「真剣に遊ぶ」いわば「遊びは、真剣に遊ぶことで遊びになる」という遊びの動的実存としても、「常なる更に」の追求（creativity）として「余地・シェマ的な緩さを見逃さない真面目さ」へと結び付いている[13]。このように、対象／メタの階層性を、**対象でなく動態的実存へと（空間的というよりも位相・共鳴的に）射影する「方法の方法」**（としての wisdom）へとつなげようというのが、本稿の最終的な目標である。「囲い込み」は、そのような位相・共鳴的射影の（非調和的・非共鳴的なものとの接続の潜在性を与える）境界条件の設定としての「空間化」であり、一人称（相対的にメタにある動態）から三人称（相対的に対象にある不変／普遍項：**不定の・見ず知らずの他者**との関りのポート）の**場の生成・設定**と見なされるであろう。

---

[12] とくに活動としての知を自立した原子的点における作用と見なすジョン・ロック的前提（ロックについては Taylor (1989) からの借用である）を見直すこととして。

[13] これは、ホワイトヘッドにおける「全面的に生きる living entirely」ということと深く関わる。ただし、後段 Discussion 4 で詳述するように、我々が、問題を「学知」ということに焦点化し、概念化、対象化、記号化といったことにおける「避け難い契機 moment」を明らかにしつつ、三層の「隙間・遊び」を通じて捉え直していることは、その「生きる」ことの「主体性」の意味において、またその「責任」および「道徳性」ということおいて、一層重要な視座を（「学知」の「方法」という観点を通じて）「増し加える」ものと考える。

Discussion 3（分析哲学との関連）分析哲学において、特にパトナム Putnam (2002) における認識論的価値 epidemic value および「事実と価値２分法」に向けられた問題提起は、それらが例えば各々の学問実践や知的伝達の場と言った様々な顕在化場面を示すこと含意するとしたうえで、ここでの虚焦点、シェマ的なあり方、「間違い」の第三層、等々と密接に関わるもの、いわば分析哲学側からの、ここでの議論に向けた橋渡しと言って良いであろう。パトナムに関しては、Quine (1953) の２つのドグマの問題提起が、それ以前にあることはもちろん言うまでも無い。一方でクワインの概念枠を第 3 のドグマとして実践の各場面のある意味での絶対性を主張したドナルド・デイヴィドソンは概念枠の多数性が状態的に把握されかねないこと、我々の構えの側に立つときに、知性の個々の働きが単純な作用として考えられること＝私としての現に作用する主体の私としての唯一性を仮定することに相関して統合的な唯一の概念枠（自分が現に使用し従っている枠）しか考えられないと考えている (Essay 13 “On the Very Idea of a Conceptual Scheme” (1974) in Davidson (2001))。これは顕在化における現実性 actuality の特性として重要なものである。しかし RSFF では、さらに社会学では、異なるサイズの原子化された知の外延的関係のみではなく、縦横の横断的・リゾーム的な関係に分散する知の現実性を考えるところが異なる。

Discussion 4（ホワイトヘッド・プロセス哲学におけるリアリティとの関係）「具体性の置き違え」というホワイトヘッドの議論（[SMW] Whitehead 1927 と [PR] Whitehead 1929 を通じたもの）および、同プロセス哲学におけるリアリティの概念と、本章の取り扱うテーマに通ずるところが極めて大きいことは、ここまでの内容から明らかであろう。我々の議論は、問題を「学知」の「方法」ということに焦点化し、更に「自我」あるいは「私」の「生きる」問題として、ホワイトヘッドの genetic 分析下での superject における「自由」性（そのもたらす「開け」／存在容態）ということを捉え直している。これを通じて、「私」といった「主体」の形成以後に初めて認められる問題を、改めて捉え直そうとしているのである。実際、superject ということが actual entity という「長さ duration」を持たない（genetic に歴史性は持つとしても）水準での発動である場合に（つまりホワイトヘッド的「抱握」の取捨選択の水準での発動である場合に）、そのような取捨選択が「長さ duration」を持った（自立した自己「私」という中での）ネクサスレベルの合生を「通じて」、なされているものであるということに向けられた強調は、常に不十分なものになってくるという印象を禁じ得ない。何故なら、ある actual entity の（actual entity としての）客体化（**物的極**・自身の**作用因**）と主体化（**心的極**・満足の**目的因**）は、既にその「（抱握の）与件となりうるものの範囲」を通じて、固定化され、定まっているからである。そのような状況では、「抱握」の主体における（選択の）「正当化」を通じた道徳性との関わり [PR,p.105] において、「私」という長さを持つ「主体」が、その「私」自身およびその置かれている場所そのものについての虚焦点・シェマ的な「把握と同時にある」責任のようなものについて、actual entity は十分に引き受けることができないのではないか。これは、第三層の誤謬とも関連している。全てが誤りかもしれない状況において、何らかの主張と行為の「罪責」感の担い手は、その主張の（そのネクサスレベルにおいて任意の）機会に直結し、duration を持つ、常に新たなところの「私」に他ならない。道徳性は genetic な actual entity の抱握ではなく、その満足とともに時間の中にある「私」の水準での行為・発動を踏まえた、その「罪責感」というべきものをともなって、語られるべきものではないかと考える。「囲い込み」は、言わば「ポジティブな概念的抱握」と「ネガティブな抱握」を同時に展望した「（見えないものから目を逸らさない）構え」でありそのような場所を提供しているネクサスである。「empty space」において個々の「actual entity」が「全面的に生きている」という状況に比して言えば、次のようにも言えるかもしれない。それは「学知の成立」における「避け難い契機」（moment/motif）およびその「緩さ」と引きかえに許容された調整の可能性に基づく「制御」（秩序化）そのものを**「欲求」**とした、「私（達）」が「自己超越体」として「生きる」ための共通した「構え」である[14]。我々の「囲い込み」という概念は、このように「（全面的

[14] 本章におけるリアリズムと学知の問題を、このようにホワイトヘッドの有機体的な科学論と関連付けることについて、村田晴夫教授 (St. Andrew’s University) ならびに同氏の著作

に）生きる」ことに近いこと（しかし「学知」といった「避け難い契機」を「欲求」として持つ）「私（達）」を出発点とすることで、ホワイトヘッドにおける自己超越体の（少なくともその [PR] での genetic な分析に対する）不十分な印象を、克服しようとしている。

Discussion 5（プロセス・関係性・作用としてのリアリティを考えるその他哲学との関連）上述したホワイトヘッドのプロセス哲学に限定されず、プロセスとしてリアリティを捉えるという方向性そのものは、例えば社会システム理論における Luhmann (1984)、あるいは関係性的転回といったこととも深く関わっている。また、古くは関係性（**縁起**）ということを全ての根源に置こうとする、**大乗仏教**での**龍樹**のようなインド思想、**斉物論的一元論**としての老荘思想、禅および日本における京都学派の哲学などにも特徴的に見ることができるであろう。いずれにしても、このときプロセスを量化して普遍時間コードと多様な状態のペアに分解しないことが RSFF との接点を見出すときには必要である。龍樹であれば「運動」は「去来（普遍時間）」にまつわるものとして否定される。RFSS における「運動・方法」とは、その意味で「去来」とともにある「運動」ではなく、例えば an attitude（本稿第 4 節）としては Heidegger 1927『存在と時間』における**先駆** Vorlaufen あるいは、他者を含めた attitudes（本稿第 5 節）下においては Levinas 1974『存在するとは別の仕方でもしくは存在の彼方へ』における**倫理性**といったものと、対比されるべきものであろう。

4 「学問の方法」と「知（のリアリティ）を成立させる場」について（クワイン２つのドグマ、事実と価値２分法、今日の科学論の限界）

リアリティを**虚焦点・シェマ的なあり方という構え**であるとすることは、理念などの焦点的統制による中心化的統合に関わるものと、様々な機能・場面に分散した横のつながりを通じて一層開かれたものとの、それらの間のリゾーム（地下茎）的な関わりとしてリアリティを捉えるということでもある。ここに RFSS が、「社会」（の）学ということを「通じ」て、その movement ということを主張している意味が、存在している。ここまでは、ある「構え」としての実在性ということを捉えるという話であったが、それが「誰」の構えであるかは特定していない。というよりも an attitude という単数性が、暗黙の前提になっている[15]。

しかし「社会」学では、構えの多数の実現と、異なる水準とが現れ、その間の動性と単数性の多様な関りが、レベル横断的に、またメタ的な時間性においても非同期的に、現れる。一つの構えを持つものが世界に棲み込む、と言えるなら、社会とは、様々な構えの多様（Kant 1787 の das Mannigfaltige や「カオス」？的な）として世界に棲み込むとともに、自らのうちに世界をある仕方で棲み込ませる、**世界（の存在）の構えの一契機**ともいえるであろう。

Remark 1（「構え」としての公理的集合論・クリプキ宇宙・圏論等について）そのような構えの一つとして、例えばあくまでも数学的な、公理的集合論、あるいは超限的な帰納法を許容する立場とともに、記号的言語をその根源にした不動点としてのクリ

Murata (1990)[Ch.6] 『情報とシステムの哲学— 現代批判の視点』（文眞堂 1990）第六章ホワイトヘッドの秩序論についての考察からは、多くの示唆を頂いた。

[15] これは、例えばホワイトヘッド [PR] においては、基礎的なアイテムである actual entity の、その concrescense がプロセスの単位性として置かれることに対応している。

プキ宇宙 (Kripke 1975) のようなものを、想像する人も、いるかもしれない。ただし、後にも（脚註（18）述べるように、それは Universe としての（超限的）構成を目指した（それしか見ない）、一つの理想主義的な立場に過ぎないことに注意を促しておく。我々のここでの立場は、シェマ的な遊動性に関わっているものであり、一層望ましい「構え」としては、むしろ図式としての性格の強い**圏論**（直感的集合論に対応するものは**トポス**、**アレゴリー**等）であろう。ここには「プロセス」を表象することとの表裏一体性（それには潜在→顕在のメタ的「同時性」が関わる）が必要であり、圏論はその「囲い込み」（の道具）と見ることができる。集合論を基礎の構え（の道具）とする場合であっても、例えば空集合存在公理を用いずに、universe を構成するような立場から離れて、Model 理論的な multiverse （Hamkins 2012 など）といったものにおける、記述的側面からのスキーム的共通性のようなものを基礎に置くならば、我々と同様のシェマ的「ゆるさ」を「見失わない」立場を取ることはできるだろう。

しかしながら、一つの構えに焦点を当てて論じることは、同時に他の、また回帰的な仕方でその構え自身のなす多様に働きかけることであり、そこでの焦点化された構えの identity はそれ自身の実体的・存在論的な内的本質というよりは、その世界への棲み込みを変容する社会的棲み込みにおいて**調整される仕方**にあるように思われる。

Remark 2 (クワイン「２つのドグマ」とここでの「構え」および「調整」) クワイン「２つのドグマ」 (Quine 1953, ch.2) における分析性の定義に帰着されるような、あるいはパトナム (Putnam 2002) が「認識論的価値」と呼ぶような、いわば「避け難い」契機と引き換えに、認めざるを得ない多様の存在こそ、学ということの成立をリアリズムとして主張する立場においては必然と言うべきであろう。もちろん、ここで今まさに主張している「必然」の成立が、学の根底において「通じて」いるのでなければ、今こうして「議論もしくは対話していること＝調整」そのものが、不要ということになる。あくまでも「経験主義者」としての、クワインの表明する「徹底したプラグマティズム」という立場は、そのような棲み込みとともに**焦点化された**構え、とも取ることができるだろう。これはまたマイケル・ポランニーが焦点的感知・従属的感知・知るもの (focal awareness・subsidiary awareness・knower) という具体的な認識を考えるときの三契機でいえば、「認識論的価値」は（明示的に対象化される）「焦点的感知」に、「認めざるを得ない多様の存在」は「従属的感知への参与」、**焦点を当てられる**一つの構えは「知るもの」とそれぞれ相関していると考えられる。ただしポランニーは制御遂行的な意味での知るもの＝個人という現場に重点を置いている（Cf. マイケル・ポランニー／ハリー・プロシュ『ミーニング：人間の知的自由について』Michael Polanyi/Harry Prosch, 1975, *Meaning*）。

この**調整**の主要なもののひとつはコミュニケーションである。

Remark 3 (Communication) コミュニケーションの存在あるいはその成立ということをもって、そのような棲み込みの中で構えが焦点化されるということを表現する方法はいくつかあるだろう。一つの方法として、例えば対話の成立のようなものを考えるならば、まず最初にそのメッセージを表す道具としての記号的シンボルの成立を認めるということが先行せねばならない。そうした記号の成立は、おそらく学問の成立において、ほぼ避けられないものとして合意されるであろう。しかし、以下では、コミュニケーションとしてより一般的に、言語以前のもの、あるいは A から B への関係性として、何らかの意味形成以前のものまでも含めて、まずメッセージという言葉を用いながら、この調整について考える。

コミュニケーションということを（方向性を持った何らかの伝達と考えることを通じて）射影コードとして扱うとき、つまり A から B へのコミュニケーションという**有向**的な関係を、前節同様に射影という比喩で扱うとき、先の「objectification through projective operations toward the direction of concepts」と

同様の議論が、ここでも可能となる。先の「対象化」に対応するのが（B において受け取る）メッセージになる。これが虚焦点・シェマ的表現であることは、（B において受け取られている）メッセージの解釈の多様、メッセージからの創造（伝わり方が幅を持ってしまうなど）の可能性で示され得るであろう。またこのメッセージの（数字的、あるいは記号的な成立を前提とした上、それを送る A の側からの解釈、創造の可能性も考慮して、その相互およびメッセージ全体を考慮した上での）虚焦点を物象化して特定の（A および B における解釈の関係性としての）価値性というあり方を開く**装置**の実例が、**貨幣**であり**言語**であろう。内容の確実性や真理性が世界と関わりながら、一つの**準開放的な回帰性**をもつ価値性の維持（他者との交わりを経た学習の結果として継承される習慣・慣習、現実の言語使用のような）が行われるということに、これらは関係している[16]。

科学哲学や言語論的展開の下にこのような（世界と関わる）相があることを考えるならば、「語用論」的な立場を哲学から移入して「社会」の学（あるいはその「方法」）に適応するのではなく、むしろ「社会」の学ということを通じて、より一層根源的な視野をともなう「学知」および「方法」という可能性が、あるのではないだろうか。

Remark 4 (クーン・ラカトシュ) 哲学からの移入ということを考えるだけならば、「方法論」という問題が改めて考え直されるその度に、「social study」を構築し直すことを通じて、「学知の成立」ということの新たなあり方を考えるという立場になるであろう。それは、あたかも方法・論理のレベルにおいて、パラダイムとしての各理論に向けて最終的にはポパー主義が有効となるように規約または構造を組み入れてしまうような、Lakatos (1978) 的立場（Kuhn 1962 の拡張的立場としての）と、実質的には似たものになる。またその場合、「an attitude」の下において、ともかく「調整」され終えたものが、ここで述べられて終わりということになる。実はそれだけでも、以下における 図.2 を用いて説明されるような「違い」を考慮するならば、学知の方法という意味での新たな含蓄は、既に存在しているのだが、我々の主張は更にそれを踏まえた上で、次節の「**集合知**」の問題を見据えている。

社会学がもともと多数主体における哲学を目指していたこと（e.g., Durkheim 1955 『プラグマティズムと社会学』のような）を考えれば、ここで描こうとしていることは、まさにそれが個人 an attitude における思考のイメージと調整されている過程ということに他ならない。

Remark 5 (汲み尽くしえないこと) 「an attitude」の下でも、「汲み尽くすことのできない実在」ということに立脚するならば、例えば一般均衡動学的（あるいは Keynes 1936 General Theory 的）な不確実性といったものはあくまでも**本質的な不確実性**として取り扱われねばならず、そしてそのような attitude の下でなお、「社会」の学の方法論ということが問われなければならない。つまり「an attitude」の下においても、「アソビ」の第二層を「常に（汲み尽くされることなく）」含まなければならないということが、RFSS の立場から従来の科学方法論に向けられた意義として、明確に存在している[17]。そして、更に話を進めて、次節で扱うテーマ、「理性」を能力として対象化するのではなく、メッセージによるコミュニケーションの成立といった関係性として、

[16] 上記のような**哲学および哲学知**についての感覚は、アラン・バデュウの『哲学の条件』第 1 章「哲学自身」(Badiou 1992, *Conditions*, Part 1, “Philosophy Itself”) と共鳴し得るものかもしれない。

[17] 著者の一人（Urai 2010; ch.9）が、かつて「合理性の定義不可能性」ということを通じて、社会における「価値決定の本質的な不可能性」ということを取り扱ったことも、このような意味に整理し直すことができるであろう。

理論の使用を準開放的に自己回帰させる「場」として描くこと、そのようなものとして RFSS を考えることは、まさしく RFSS の意義の第三層と言える。方法も、手法も、論理さえも異なるような、異なる attitudes の間でもなお、学知が成立するとはどういうことか。これが次セクションの、**虚焦点・シェマ的な「（広義）理性」**の捉え方という問題として、扱われる内容である。

学知の「方法」ということについて（ここでは学知という言葉を知の追求として、科学という言葉よりも広く用いて来たが）従来の科学哲学と、ここでの立場の相違を極めてシンプルに述べれば、次のようになる。従来の科学哲学、素朴な論理実証主義からクーン・ラカトシュ的なパラダイム論に通ずる科学観への移行においては、方法・論理から、対象の認識（科学＝真理の追求）に向けられた、一方向の位置付けがある（Fig.2）。RFSS の Realism は、その diagram に左下「対象および社会」から右上「方法・論理」へと向かう直接的な（「経験」による）作用（そこから目を逸らさないこと）を与えるものであるが、通常そのような関係性は、科学の方法そのものを最悪「**anything goes** の相対主義」(Feyerabend 1975 のような) へと陥らせてしまう危険がある。方法・論理、認識、社会、その全てを通じて、実在ということが「対象」化された「状態」というモードでの理解内容に終始されてしまうとき、自己（という an attitude）が世界に棲み込み（dwelling in）ながら、同時に世界を棲み込ませているということの、対象認識レベルにおける整合性が問われることになるからである。

Remark 6（Anything Goes と制御および歴史的装置としての回帰）上で、実在ということが、「対象」化された「状態」というモードでの理解内容に終始されてしまう、と述べたことは、断片化した自由のもとでのブロック的組み合わせを基礎的な構成と考えるから、と言い換えても良いかもしれない。断片化した自由の下にあるものは、（次節で述べる）**「制御」**の各場面での実現の構成要素であるが、それが「制御」であるためには、背後の潜在的な関連性とその潜在性を現実性としての顕在性に結びつける回路が必要となる。これは**習慣・パターン・回帰**などの実例という**歴史的**装置によって（帰納的に）示される。具体的には**準安定な回帰的プロセス**が存在すること、と言っても良い。必ずしも顕在的でないにせよ、潜在的に準安定性への接続可能性を考慮する（Peirce 1878 は真理に関して「fated 運命づけられた」命題という言いかたで、このことを考慮していたように、思われる）ことを忘却すると、「見えるところだけ」の anything goes に、見えてしまうということである。リアリズムという言葉のそのまた背後にある「見えないものを見ようとする」こと、「知らないことを知ろうとする」こと、これはまさしく知の立場としての「最小限の回帰・再帰」であり、「潜在的に準安定性への接続可能性を考慮すること」に他ならないと言える。そう考えれば、この**「潜在的に準安定性への接続可能性を考慮する」**ことは、**「見えないものから目を逸らさない、知の立場」**のメタ的・行為的な契機、あるいはほぼ同値の事柄と言えるかもしれない。

この問いに向けての解答は、既にクワインのドグマ、パトナムの認識論的価値といった議論だけでも十分に、an attitude として、上記方法論図式の円環性（論理実証主義および安定したパラダイムにおいては）を、方法・論理 (1), (2), (3), ... のような、どこまでも限りなく（円環というよりも）**螺旋的**なもの（進歩、発展、上昇、収束と言った楽観的見通しを持たせることのないもの）へと、導くであろう[18]。

[18] そのような見通しにおいても、なお「an attitude」の下での整合性を、例えば形式的にはクリプキ宇宙のような「決定できない命題」の取り込みを（虚）焦点とする不動点的取扱いによって、あくまでもそういう「an attitude」として、俯瞰するようなことならできるかもしれない。そういった集合論的な展望は、公理的集合論あるいは数学というものを、普遍的な学

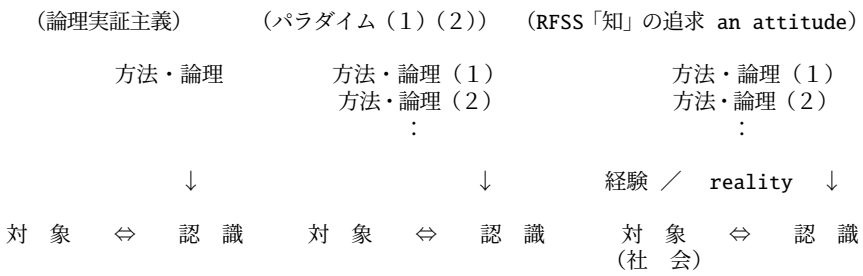

Fig. 2 論理実証主義・パラダイム・RFSS 方法論のダイアグラム

RFSS は、そのような（整合性への）「問い」をも含め、全体を健全なものとして、この可換的図式とその状況、その「螺旋」的な全体像（Fig.2 最右辺）そのものを、学問のあり方の重要な、しかし一つの契機として認めるための指針である。これは、学問の方法ということが、「対象」（状態）を基礎とするレベルから、「行為」を基礎とするレベルに向けて、述べ直されるべきということを主張するものでもある[19]。

RFSS において「an attitude」、つまり一つの「構え posture」として把捉される、学問、科学、理論等々は、強いてそれを対象化された状態的に言えば、あくまでもシェマ的な、「幅」を持つものである。その「幅」とは、まずは上記「螺旋」の巡る（方向も変えて往来する）幅が、事後的に一つの類型として把握されたものである。また、その往来における、「学知」レベルでの（社会への）**参与**（これは詳細には次節の内容になる）のもつ未定への**被投的な投企**と事後の類型化が、受動的綜合であることの表現とも考え得る。そしてそれは、常に「我々は根本から間違っているのかも知れない」というスタンスを、（真面目な play/game の行為者として）必然的に持つべきということと、直結している[20]。更に「社会」とは、そのような attitudes が、コミュニケーションを通じて、多様に混在しているものと考えられるが、これについては、次節で取り扱う。

問の論理という地位に置きたいという気持ちを昂めるには十分である。しかしながら、少なくとも ZF 公理系、それどころか、一階の述語論理の完全性を示し得る最初の ε 数までの超限帰納法というレベル（例えば Takeuti 1987 等を見よ）でさえ、それよりも遥かに単純な一つの問い「しかし、我々はそもそも根本から間違っているのではないのか」に向けて、凡そ自己を防衛できるとは思われず、事実 ZF では「そのような防衛などできない」ことが「証明」されるのである。集合論的展望は、あたかも現実の我々が直面している、学問とその方法の、その極限を理想の上に眺望できても、その眺望に立脚して、その「**使用**」において、極めて単純に「根本から間違っているのではないか」という問いに応えることが、できないのである。

[19] 先に、コミュニケーションにおけるメッセージの解釈に関連して、既に指摘したところであるが、同様のことは、「社会」ということを通じて、**言語の成立**、貨幣による**価値の成立**、といったことに対しても示唆される。

[20] これを Heidegger 1927 的に言えば存在への気遣い (Sorge) といえよう。

5 「知を成立させる場を構築する」とはどういうことか：科学論を超えて、社会参与と理論の使用、対話と制御、らせん型の RFSS プロトコル等

前節では、「科学の方法」ということを拡張し、「社会（対象）」に向けられた「認識」とその「方法」という三層から、それらによって「知を求める attitude」として（いわば「学知」のリアリティを）「囲い込む」ということを行った[21]。従来の科学方法論は、そのような diagram においては、「上からの」一方向の立場として位置付けられた。RFSS の立場によるその拡張は、「an attitude」としての、そのような「囲い込み」における、双方向かつ螺旋的な、幅として捉えられた。本節では、より一般的に「知を求める（社会を通した）**集団的な構え**」と呼ぶべきものについて考える。これは「知のリアリティを構成しようとする場所」としてシェマ的に捉えられる「**（広義）実践理性**」につながるところの、RFSS の基本的立場と言えるのではないかと考える。このような文脈では、**方法もしくは（広義の）論理**という言葉に代えて、**運動**という言葉を用いる方が（どこまでも、対象／状態把捉から、それは逃れているということを表す意味で）相応しい（Fig.3）。（Section 3 の Diucussion 5 でも述べた通り、この「運動」という言葉は、「去来（普遍的時間）」とともにあるものではなく、それとは全く異なる、メタの立場で用いられている。）

前節の「an attitude」が（社会を通じて）どのように成立するかということは、実際には「communication」ということに開かれている。そして、もし communication ということを、以前のように message を通じた概念的射影操作と捉えるのであれば、「an attitude」の成立は、まさしく社会における「**記号・シンボルの成立**（言語が通じるとはどういうことか）」あるいは「**価値の成立**（市場や貨幣の成立とはどういうことか）」といったことにも、同様に開かれていることを、認めねばならない。そしてそのことは、「私」と「社会」の重複した「棲み込み dwelling in」を通じて、そうした「問い」が、どこまでも徹底的に「関係性」を基礎においた再構成（記述と認識の問い改め）ということに、また開かれていることを示唆している。従って、そこには例えば（数学的道具

[21] Fig.2 最右辺の diagram の中央に「reality」と記したのはそのためである。「学知のリアリティ」とは、「学知を求める attitudes」を通じて「囲い込まれる」ものとして、RFSS では「プロセス」として取り扱われ、そうした「attitudes の多様」を成立させる「場」として、RFSS の「知を成立させる場」が以下では規定される。Section 3 の Discussion 4 では「囲い込み」を「構え」と述べたが、ここで一層正確に言えば、それは単なる「an attitude」としての構えではない。それは、「学知」という焦点化を通じて（その避け難い「概念化」という motif/moment とともに）、「社会」の成員の「attitudes」の多様を（考えられる限り緩やかに）許容するような「場」（として、場合によっては集団的でもあるような、構え）である。あるいは、「制御とその外側（根本的に間違っているかもしれない可能性）」という inexhaustible さを、「私 I」の「（学問的に知を通して）生きる」罪責としてその地平に見据えているような「場所」（ホワイトヘッドの言葉で言えば「cosmic epoch」[PR,p.91]）」と言えるかもしれない。更に注意しておくと、これは、あらかじめ独立して措定された「囲い込み」ではない。「周辺三項で表されるプロセスの潜在的な展開可能性」と「実際の道行」とが関わりながら経めぐるありさまそのものの潜在的延長化（possible extension?）によって、「囲い込まれる」ことで三項のスキーム（posture）としての幅広い多様性を許容する「場所」である。（ラカンの「「le reél ／ reality ／現実的なもの」という穴の周りを廻る「signifiant ／ sign ／意味するもの」に似たイメージである。例えば Lacan 1959; Seminar IX, p.121, ”*the fashioning of the signifier and the introduction of a gap or a hole in the real is identical.*” 等。）

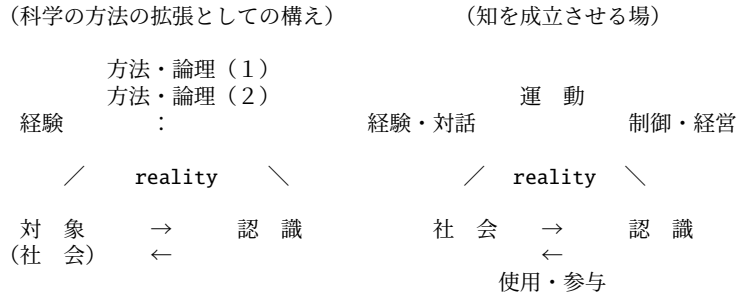

Fig. 3 「知を構成する場所」についての diagram

として）圏論・トポス・アレゴリー（例えば Freyd and Scedrov 1990 あるいは Goldblatt 1979; Topoi 等を見よ）といったものを通じた、今日「社会」の科学理論の「言語あるいは価値レベル」からの再構築（少くともそのオルタナティブな追求）という可能性が、残されている。もちろん、ここではそれらについて、その可能性を示唆するに止めるしかない[22]。

けれども、**集団的な構え**として「知を成立させる場」を考えようとする本節において、Communication を通じて、**社会（対象）**から**運動（方法・論理）**へと影響を与えるものは、もはや an attitude における経験にとどまらない。ダイアグラムの左下から上、社会における communication（言葉や交換といったこと）を通じて、運動に向けて与えるところ（運動がそれらに根差すところ）には、先の経験に加えて「**対話**」というキーワードを付け加えたい。経験ということについてもまた、ここでは、もう少し言葉の上で（対話的そしてできれば集団的な）キーワードを付け加えるならば、新たな「**問い**」（「見えていない」ことを見逃さないことから来る）のようなものが、適切かもしれない。いうまでもなく、ここでの「対話」ということには、結果における内容の合意ということではなく、その継続ということ、相互の潜在性の尊重ということ、そして更なる新たな「問い」の共有といった意味での**協働 (coordination)** の可能性が、含まれている。

そして、ダイアグラムの右下から左下、認識から社会に向けられては（理論等の）**使用**ということが、新たな鍵となる。これは単に学問的に実験されるというような意味ではなく、学問の意味内容の理解を介しての生活世界での各人の実践や、様々な社会システムでの政策等を通じて**実際に使用される**、こととして理解されることが大事である。また複数の**個**が（そして attitudes が）、それぞれの**個**の棲み込みを通じた、社会への**参与**という考慮も、ここでは新たな鍵となる。この場合の複数の「**個**」とは、人間社会のような併存を特徴とする集団としてのみではなく、個人と社会、情報リンクによって個人の思想や感情に影響を与える文化的アイテムや活動のベースたる生体面に必要な物資・栄養サプライシステム、活動領域のニッチ的調整に影響する特定の機能生態系など

[22] RFSS Springer 書籍（Urai et al. 2023）第二部における経済学のリアリティにまつわるいくつかの章（特に第８章および第９章）においては、経済学のリアリティを常に全体性に向けて開かれた「下からの力」と位置付け、本章における「囲い込み」と、その意識が意識されている。

その種別、役割、相互配置の在り方等で極めて広範かつ多岐にわたり得るものである。

これらのことを通した上で、ダイアグラムの上から右下について、運動から認識に向けられた「**制御**」もしくはその最も広い意味での「**経営**」と呼ばれるべきものが存在しているということが、先の「学問の方法」のダイアグラム（「an attitude」における螺旋図）をこちらの「**知のリアリティを成立させる場**」あるいは「**集団的 attitude**」のダイアグラム（Fig.3 右側の螺旋図）へと深化させている。この「制御・経営」は、「科学の方法」として述べられていた際にはまさしくその「方法」が「認識」に向けて適用されるところである。それは、「学知のリアリティ」を囲い込むにあたって、何度も強調されてきた inevitable motif として、「可能な限り緩いもの」であるべきという要請内容（**凡そ、必要最低限の論理的整合性と最小限の「帰納性」としてまとめられるであろうが**）そのものである。そしてその要請もまた、可能な限り多様な attitudes を参与および対話へと導く協働 (coordination) の「場」であることと焦点的かつシェマ的である（そうでしかありえない）こととの間における整合性からくるものであった。しかし、そうでありながらもまた、そういった契機においてなお、概念化における言語の果たす役割、記号・図形の果たす役割、棲み込み（dwelling in）における摩擦等々を通じた、それらの「**歴史性**」ということからは、逃れ得ない。「状態・対象」を基礎に置く限り、「学知」はその「自由」性 (self-reliance) を（いずれ何処かで）喪失せざるを得ないのである。「学知」の「自由」性のためには、個々の「私」の「生きる」ことが、関わらなければならない。すなわち「見えていないものから目を逸らさない」こと、言い換えれば「私」が「真面目に遊ぶ（play/game）」ということを、単なる「私」の「主義・attitude」ではなく、「（我々の）学知」の成立ということの「最も緩やかな条件」として位置付け得るということ、そのことこそ、RFSS から「科学方法論」に向けられた、意義なのである。

「**知のリアリティを成立させる場**」とは、このような集団的 attitude として（個々にとってはあくまで an attitude として）類型化されるような、上述「螺旋」構造の（歴史上 temporary でありかつ「**真面目なアソビ（play/game）**」として必然的に捉えられた）幅を持った在り方である[23]。ここで、真面目な play/game であることの「真面目」さが、上で述べた通り極めて重要な意義を持つ。この真面目さは「見えないことから目を逸らさない」リアリズムから通じたものではあるが、それを支えているものを、ここでは（つまり学知の追求という焦点化の下では）単なる主義=イズムの水準に落としてしまうのではなく、「私」が「学知を通して生きる」ことの（「見えていない」ものがあるということを通じた）「**罪責**」感（sense of guilt）という水準に、もたらすからである。この「罪責」感は、「私」が「学知をもって生きる」ことにおいて「真面目」にアソブ（play/game する）必要を呼び起こす原因であり、同時に、真面目であって

[23] ここで「個々にとってはあくまで an attitude」というのは、そのような集団的 attitude が、コミュニケーション（例えば言語）を通じて共通理解されるといったことも含めて結果として得られるものであっても、その「言語の成立」、「共通理解」、といったことの厳密な「関係性的把握」が確定される以前において、個々にとって、それはあくまでも「個人言語のようなものの下での an attitude と呼ぶ他はない」という意味である。例えば、クワインの翻訳の不確定性 (Quine 1960)、パトナムの下向きレーゥエンハイム・スコーレム定理 (Putnam 1983, p.3) といったことを考慮するならば、そうした集団的 attitude が、言語的に定まった後においてもなお、多様な個々の多様な attitudes としか言いようがないことも当然あり得る。

も「アソビ（game/play）」に過ぎないということの、結果でもある。つまり、「学知の追求」は、この意味で厳密に「**倫理**」と関わる。そして「学知」の「**自由 (self-relience)**」性は、そのような「私」の「罪責」感および倫理感とともに（厳密にはそれを通じて初めて）成立しているのである。

「**理性**」とは、こうした「場」において「運動」の「制御・経営」のあるべき極限（究極的制御）として、通常捉えられるものである。しかし、以上のように考えると、「理性」が能力という形で（つまり究極的な、上からの統御的な制御として）理解されることは、概念的射影操作による「対象化」の結果としての理性を礎石に据えていると言うべきであろう。そうではなく、今や、理性をあくまでも集団的 attitude として、つまり歴史的であり、局所的でしかない、「螺旋」の往来する幅（としての「posture」）を指すシェマ的なものに過ぎないもの（一方向への発展、あるいは極限に収束するといったことさえ、期待することなく）、と捉えることもできる[24]。

「理性」の表現が虚焦点的・スキーム的であることから、あたかもそれを先の「メッセージの解釈」のように、理論の使用や真理などの価値性が遊びを通じての外の世界との関りをもって準開放的に自己回帰する「様態／状態」として考えられることになる。もちろんそこまで（つまり「様態／状態」として survey・理想化するだけ）なら、例えばハイエク（Hayek 1973 等）の市場（下からの forces・the spontaneous order）の究極の姿として、「「概念的射影操作」による対象化の結果としての「理性の世界」」を理性化することもできるかもしれない。すなわち、時間横断的に設定した金融市場として「世界性およびすべての時間」をコード化した関係のシステム、つまり「超」俯瞰的な情報によって制御されるシステムとしてである[25]。しかし、ここでのリアリズム（展

---

[24] こうした無限の螺旋構造において、その無限性を展望してしまうことで、関係性を捉えつつも、それを究極的にはその極限としてどこかで状態化し、俯瞰および理想化してしまう集合論的立場と、あくまで理想化せず、どこまでも関係性化していこうという立場がある。どこまでも、関係性化していこうという立場は、数学では「圏論」化、社会学では「関係性的転回」であり、ここで主張する RFSS の Realism というスタンスに見合う立場でもある。大乗仏教であれば、「空」の立場、「無自性」（その性質を持たないこと）、そしてありとあらゆるものを究極的には「縁起」（関係性）と捉えるということ（龍樹『中論』）に当たると、言えるかもしれない。ここには、カント的「実践理性」の「(絶対) 無の場所」における位置付け (Hanaoka 2021)、何処までも問うという「問うこと」の根源性 (Murata 2023 「哲学スル力」)、あるいは「脱-存在論」としての「Logic of the Place (of Nothingness)」（Tanaka 2016）といった（本稿のテーマに重要な示唆を与える）問題もまた、集約している。

[25] ありとあらゆる情報からなる情報、全ての状態からなる状態といったことを考えることは、集合論的展望としても危ういものである。けれども、あくまでも、不完全な展望的視座からの問題提起として、ハイエクの市場観ならびに自生的秩序観といったものは、「下からの力」という、まさに「経済学のリアリティ」そのものを表現しようとしたものであり、「市場」という概念を、それこそ常に虚焦点化、シェマ化していくということが（常に新たな自己横断的開裂、のような形をともなって）なされるならば、我々が本節で行うような議論と類似のものを、期待することはできるかもしれない（先の脚註 22 参照）。ただし、このハイエクの「下から」は、現実の研究というメタレベルでの進行が常に「部分」的で現実には「究極」に達していない、という意味ならば、科学に関する通常の健全なメタレベル経験論と同値のものである。「理論内容」と「理論の営み」の二元論において矛盾する要請を、分離によって調整することが、実践的制御において**対象知と実践的参与が分離できない**ものである、ということを（少くとも**ポパー主義**までの従来の科学論がそうであるのと全く同様に）隠蔽してしまっている。幅・すきま・遊びはそのような二元論的分離ではなく、真面目な接合・実践的一体化とまさにその接合による不定性の招来とを示すものである。

望・理想ではなく）の立場として[26]、あくまでも「運動」から「状態」の方向、すなわち螺旋的往来の局所的な**幅こそが先行する**ものとするとき、そのときに「潜在」から「顕在」への動きのもつ不定性が、この回帰の安定性を内から侵食することで、新たなものの到来を「常に」孕むということになる[27]。そこに reality 実在性の「汲み尽くせなさ inexhaustible 性」の一端が現れていることを、学知は常に考慮すべき（**見逃さない**）ということであり、学知の追求（それを通して「生きる」「私」）は、その成長において育まれる場所・大地に根ざした経験ということの上で、常にその思考・考慮をするあり方（**すなわち「自己には見えていない」ということを見逃さない Realism というあり方**）が、望ましいと言えるのである[28]。

従って、「「知」のリアリティを成立させる場の constitution」とは、そのような広義「**理性**」の、その「**運動**」としての働き（制御・経営）を、「認識」から「社会」に向けられた、**使用と参与**に基づく**対話と経験**を通じた調整に、**健全に根差す**ようにするということであろう。特に現実社会での具体的活動を通じて強調すれば、それは (1) どこまでも「対話する」（協働する）こと、そして (2)「私」（たち）が「**自由**」に（＝「罪責」感としての倫理をともなって）どこまでも「問う」こと、これらの重要さに、帰するのである。

6 結論および更なる議論：「見えないものから目を逸らさない」リアリズムとその意義

２０世紀以降の科学および科学哲学は、それが「科学」とその「方法」ということを規定し、学問を各専門分野に細分化しながら、「（狭義理論）理性」の下、様々に専門化された各学系における知識の蓄積ということには、成功したのかもしれない。しかし、同時にそうした「科学の方法」の方法、いわば「**方法の方法**」といった水準での、明確な指針というべきもの（狭義理論理性を上から制御するところのもの）を見出し得ないまま、喪失した状況下にあるように思われる。おそらく、それは Kant (1788) が**実践理性**と呼ぼうとしたところのものであり、西田幾多郎が「**宗教的世界観**」ということで学問の根底に置く

---

[26] そしてまた、単なる立場ではなく、そうでなければ、それは「真面目な遊び」ではないということによる、「学知の成立」のための「学知の自由 self-relience」性に等しい「罪責」感＝「倫理」性という、要請も通じて。

[27] ポランニーは周辺的感知 (subsidiary awareness) は焦点化されるとそのあり方を失い別のものになるとネガティブに表現している (Polanyi and Prosch 1975, ch.2, p.38, “...for the knower the subsidiaries have a meaning which fills the center of his focal attention”)。先のハイエクの例で言えば、資金フロー等の実際の（交換現場での）流動性の不定性（経済学的価値と会計学的価格のズレ）といったものに相当することになるだろう。

[28] またポランニー風にいうなら学知は焦点化・主題化の下の感知 (focal awareness) であり、知として周辺的感知 (subsidiary awareness) と共にあるのでなければ現実・実践の場に耐える知にならない (Polanyi and Prosch 1975, ch.2, p.44, “All knowing is personal knowing — participation through indwelling”)。

べきとしたところであり[29]、また Whitehead (1929) が speculative philosophy という形でその全体性を取り戻そうとしたところのものであろう[30]。

RFSS は、そこに「リアリズム」（見たいものだけを見ているというのではだめである）ということをもって、指針を与えようとする試みである。そしてそのことによって、従来の科学方法論に向けては (1)「見たいものだけを見ることへの批判」という意味で Realism 的に正当な批判を、(2) 「anything goes」に陥らない（真面目な遊びとしての）「自由」(self-reliant) 性を持つ（すなわち自立・秩序として）方法論的な拡張を、そして (3) 「私」とともに「他者」のあるところで「罪責」感をともなった倫理を、与えているものと言える。

発展的議論として、上記のまとめに、以下のことを付け加えておきたい。

「主語的でない論理」あるいは「場所的論理」

「見えていないものがあるということについての正当な取扱い」について述べる際、リアリティということを、どこまでも「関係性」的に見ること（「行為・作用」を「状態・目的」に先行させる方向）に、論理というものの根源的な一部分を移行させている。これは、いわゆる**主語的ではなく述語的な論理、場所的論理** Logic of the Place of Nothingness（西田最終論文 Nishida 1987, Dilworth 1987 参照）ということに対応しているものと、見ることができる。

前節まで、本稿では、例えば圏論的とか、虚焦点／シェマ的といった表現で、我々が幾分曖昧に（それ自体虚焦点的に）表現してきたものは、「上のような意味で論理を使う」ということ、言い換えれば、論理の果たす最小限の役割を維持しつつも、それを「主語的」（実体／対象的）には用いないということの推奨とも、言い直すことができる。論理を「主語的に用いる」というのは、まさに「主語」という「代入可能な」ものにおいて、あらゆる水準での「置き間違えられた具体性」に、囚われてしまうことである。いわば、「置き間違えられた具体性」からの開放ということが、「主語的な論理」からの開放解ということに、関連しているのである[31]。このように考えると、ホワイトヘッドの

---

[29] Nishida (1990)、あるいは西田最終論文 Nishida (1987)、英訳紹介は Dilworth (1987)。

[30] そのような喪失した状況下で、今日「科学」というものに、（科学）技術ということを通して、指針に等しいものを提供しているのは「産業」である。村田晴夫氏（桃山学院大学名誉教授）は、これを『文明と経営』というテーマとともに「企業文明」という言葉で捉えている (Murata 2017, Murata 2023)。

[31] 論理を「主語的に」使うとは、主語のもつ実体の含み（それ自身において自らを措定する）を論理にも当てはめること、従って、単一の「The 論理」の実在性、主語ごとの関係性（よくあるのは対象／メタの関係性）の実在化（物象化）、もしくはそういう傾向・危険を常に同時に孕むものである。対して、「述語的な論理」とは、述語の「形式」としての汎通性、に常に開かれている「場所」というべきものである。概念的射影操作による「対象化」として「スクリーンの外」から眺めるのではなく、射影の軸そのものと同じ場所、その中での様々なポジションの結び付けによる、「共在」という存在様相そのものとしての場所である。その結果、仮に（無限遠における）「理想的スクリーン」を（場所の「あくまでもイメージ」として）設置するならば、それは（対象／メタの関係の極限的同一化として）「主語的」な論理の使用を包摂するようにも解釈可能である。そのようなものとして、ここで我々は述語的な論理を捉えている。これは RFSS において、それを学知の「**方法の方法**」と呼んだり、「**最小限の帰納性**」と言い表そうとしていることの内実でもある。

speculative philosophy もまた、論理というものを、一層の自由さをもった、そして健全な、本来の姿に向けて、解放しようという試みのようにも見える。

方法の方法というレベルでの最小限の帰納性

とはいえ、そういった「自由」さをホワイトヘッドの哲学とリンクしていく上では、「歴史性」との関係を、整理する必要があるだろう。なぜなら、ホワイトヘッドにおいて「経験」あるいは「創造」といったことは、actual entity の concrescence と prehension ということに帰着しており、ここまで我々が論じてきた「私」の「生きる」問題を、actual entity の “living” という問題に対比する場合、そのような actual entity の歴史性の取り扱いが比較の鍵になるからである。

本稿における「私」のレベルでの「歴史性」には、「学知」の成立ということに向けての「避け難い moment (motif)」としての「（正当な）拡張」ということが、入り込んでいる。すなわち「従来の歴史、これまでの文明、これまでの知、現在の科学のあり方を含めたそれらの totality」と、「その totality の不完全さ」に向けて開かれた「場所」において、**「方法の方法という層での最小限の帰納性」（自らの改善を目指し横断する一度の回帰性）**ともいうべきものが、組み込まれている。同様に、「問う」ことの fundamental nature 根源性（自己が自らの開裂を問うこと）もその一つとして、これまでの歴史や今日の倫理（「私」の「棲み込み」における世界との関わり）、そして倫理の根源性（純粋に論理的「問い」からくるものとして）、身体、他者との関連付けも含めて、「学問する」この「私」という（そうあるべき、またそうである外はない）歴とした構え posture が、ここでの議論では基礎となっているのである。

一方で、ホワイトヘッドにおける actual entity およびそれにとっての「与件・データ」と、我々の、上述した「I」をベースにする「歴史」の位置付けには、差異があるように思われる。我々の場合の「歴史」性と「論理」の特別に重要な関係性においては、「（正当な）拡張」ということこそがその正体であった。我々の「囲い込み」とは、そういう「構え」の一般に向けられた呼称である。そしてそれは「正当な拡張」のその「正当」性に向け、「根本から間違っているかもしれない」ことへの配慮を保ちつつ、それでもなお「最小の論理と再帰性」ということを、避け難い「学知の」契機として一時的に受け容れようという試みなのである[32]。このような、「非正当性」へのある種「thrownness(被投性)」ということを踏まえて、以下更に議論を続けよう。

---

[32] Philosophy of organism に対する我々の「posture(構え)」のこのような位置付けは、Hui (2019; *Recursivity and Contingency*) が提案しようとするサイバネティクスの新たな展開可能性の位置付けに近いかもしれない。我々の場合、「再帰性」ということを、**学知の成立および自立という問題**にまつわる、「I」による「囲い込み」（すなわち appropriation）における「避け難い」原初的な「制御の単位」としている。そして、その下で、あくまでも**歴史的**経緯の中から析出されてきた（そうであった他ではないものと考えざるを得ない）**かけがえの無さ**というべきものを、**明示的に把握**しようとしている、と言えるだろう

「私」における superject 性と「被投」性

ホワイトヘッドの場合に比して、このように「私」というものを survey しながら、その「私」の土台としての「歴史」を actual entity の心的極のような立場で comprehend し直すことには、「私」（の「自」性）という制限、すなわち単なる与件 data ではなく “inevitable motifs” として自らを律する様々なルールが、伴われている。そのため、この場合の「自由（self-relience）」性は、actual entity における心的極のような理想的状況から（感じられることはあっても）必然とはならない。従って、上述した「**非正当性**」に向けて「私」がそれに対抗するには、「私」においての他者あるいは現代科学等々との関わりに向けた「thrownness」というべき 「subject-superject」性、そこに「thrown in 被投」的であるということの選択しかあり得ない。これは、「囲い込み」という意味での制限（一時的に non-legitimate かもしれないことを受け入れざるを得ないこと）と**引き換え**に受け容れざるを得ないものであるが、同時に「学知」が手に入れる自立性、自律性、self-reliance 自由性でもある[33]。言うまでもなく、これは究極的な意味でそのような「自由意志」があるのかどうかという問題（ホワイトヘッドにおいては life あるいは living ということを特徴付ける究極的な corpuscular 社会 [PR, p.105] という問題に対応すると思われるが）ではない[34]。あくまでも「私」のレベルにおける、「私」がその実践として世界に dwell in する意味の相違（ホワイトヘッド的には、あくまでも「私」というネクサスレベルにおける相違）という問題である[35]。

On “Creative Experiences”

ここまでの議論をベースに、創造的な経験ということについて最後に考えておきたい[36]。経験ということについて、ここでは（ホワイトヘッドの actual entity レベルでの prehension ということを、踏まえつつも、なお一般日常的な概念に近い）、「私」の「思惟」レベルでの意味が重視されている。そして、創造ということにおいては、「生きる」ということ（ホワイトヘッドにおいては特に

---

[33] ホワイトヘッド的に言えば、あくまでも「duration 長さ」を持った「人格（ペルソナ）」としてのネクサス「I」の確立する space（場所）において、「I」が「根本から間違っているかもしれない」というその space （場所）での thrownness をともなう在り方を選択している、ということであろう。

[34] 自由意志という問題から独立に、「学知」の moment (motif/occasion) と「I」の issue をリンクさせようとする我々の接近法は、例えばメイヤスー Quentin Meillassoux (2006) における「necessity of contingency」(Meillassoux 2008) のような思弁的唯物論に向けても、「I」とのつながりを、必然的に提供していると言えよう。

[35] この「私」について、先の「射影」する「スクリーン」の「場所」の比喩とともに述べると、これは、「私」というものが、常に「**Subject-oriented である**／実存的である」側面を捨てずに考えるということである。そしてそれは先に言及された「イメージとしての場所」の中でではなく、**射影軸とともに、「その場その場」でのスクリーンの挿入による切断をもたらし**、それゆえ理想スクリーンでは（潰れて）見えない “open cleavage” をもたらしている。そういった “open cleavages” を包摂する様々な（スクリーン）ポジションの結び付けによる共在化の装置が、ここで「歴史」と呼ぶものである。

[36] ここでの「創造的経験」という語の使用は、田中裕氏（上智大学名誉教授）の主宰されたフォーラムの名称 Integral Philosophy of Creative Experiences に基づく。

「Categories of Conceptual Reversion and Valuation」ということ）を、「私」という「人格」のレベルにおける「**自己創造**」の問題に綜合している。このことによって、「（Category of Conceptual Reversion における）独自の新しさの創造」、すなわち（ホワイトヘッドの意味も含めた）「生きている」ということの「実存」的解釈が、強調されたものになっている。特に「学知」の追求ということについてのこの実存的解釈の意義が、本稿の主たるテーマであった。

これを「creative experiences」への意義として、捉え直してみよう。「学知」の追求の「（概念的）囲い込み」は、「学知」による「囲い込み（の制限性＝避け難い契機）にもとづく Conceptual Valuation の範疇を通した Transformation」である。「囲い込み」の螺旋の幅は、動的な場所として、「自己横断的開裂」、さらには「被投性」と引き換えに確保される「学知」の「自由 self-relient 性」（としての Conceptual Reversion の範疇）をもたらしている。つまり、「私」の「生きる」問題として（真面目に遊ぶことを通じて）「私」にとっての「学知」を（あくまでも「私」における「thrown in with throwing （避け難い）被投的企投」の「構え」として）取り戻し得る、ということである。

本稿の議論は「学知」の問題に焦点化している。そして「創造的経験」というのは「学知」に限った問題ではない。けれども、本稿で取り扱った「学知」の問題は、およそ今日（科学技術に基づく文明を持つ) 世界において、創造的であるためにはおよそ必然とも言える契機と、深く関わっている。

実際、「知」は、通常の「思考」において、様々なものの「概念」化という作業を行っている。本稿では、我々はこの作業をめぐる知の活動を、「enclosure」と呼びつつ、そこに schematic なあり方、方法の方法としての位置付け、最小限の帰納性といったものを付与した。更に、それを「私」における避け難い throwness としての throwing の posture （「throw を私の構えとしてもたらす thrown in」）という comprehensive な posture として捉えた。これは、いわば「知」という活動の「制御」であり、制限を与えたということであるが、その制限は、同時に「学知」における「自立」性（self-reliance)、独立性を確保する、まさにその条件なのである。この条件は、（学知の成立にとって）避け難いものとして、最小限のものとして与えられた以上、「学知」を self-reliant かつ独立に成立させるという意味で、肯定的なものであることは言うまでもない。しかしそればかりではなく、「学知」を包括した「創造性」ということに向けても、ここで改めて（初めて）肯定的なものとなっている。なぜなら、仮に個々の「私」という duration を持ったレベルでの “prehension” ということにおいてであっても、また更にそれが “ネガティブ prehension” を無視しているという制限を単純に考慮に入れていたとしても、それらのことにともなう non-legitimacy の認識は、（リアリズムに根差そうとする）今現在の我々の立場において依然として十分とは言い難いからである。ここでの「学知」ということには、理性、記号、言語、あるいはコミュニケーションといったものを避け難く含んだ社会性、そしてそこへの「私」の indwelling と参与が前提とされている。ここでの non-legitimacy というのはそのレベルのものであって、その上で、「私」の「（避け難い）thrownness with throwing」 ということ、すなわちそこから生ずる「遊び」とその創造性ということが、問題とされているのである。（個々の「私」達はおよそ「見たいものだけを見る」ことによって、「宿命的に」目を曇らされている。企業文明において、あらゆる利潤追求主体がそのことを利用しようとするのは当然のことである。今日の世界において、我々が「私」の水準で「満

足」を追求しようとしていることについて、我々がそこに行動の原理を 100 % 委ねることなど、真に理性的である限りそしてリアリズムに根差す限り、できることではないのである。）けれども、「学知」はリアリズムに根ざすことによって、本稿が与えた「comprehensive posture」としての「enclosure」を通じて、自由な遊びと創造一般についての、真に真面目で真剣な意義を、（自立した方法で）自ら明らかにすることができる。我々はこれを通じて、「学知」を（それ以外のあらゆる支配から）解放することができる。そして、そのことを通じて、初めて「私」が「生きる」ということについても、真面目かつ真剣な遊びと、創造に向けて、やはり解放することができるのである[37]。

Acknowledgements 田中裕先生（上智大学名誉教授）にはリアリズムとプロセス哲学、プラトン的「対話」、logic of the place、そして「創造的経験」といった、多くのご教示を頂戴しました。また村田晴夫先生（St. Andrew's university 名誉教授）には、ホワイトヘッドの有機体的「科学」の取り扱いの他、企業文明、問うことの根源性といったことについて、多くの示唆を頂きました。加えて、本稿における動的な「place」を、カント的実践理性へと関連付ける方向性は、Eiko Hanaoka 先生（大阪府立大学名誉教授）のご著作ならびにコメントから大きなヒントを頂きました。多くの先生方からのご教示に、深く感謝を申し上げます。本稿の元となる草稿は、2021 年冬から 2022 年春における大阪大学方法論研究会での議論を経て準備されました。参加頂いた全ての皆様に、心より御礼申し上げます。特に福井康太氏（大阪大学）には、「場所」の構築、「囲い込み」における「螺旋」といった本稿の基礎となるアイデアの構成に深く関わるコメントを頂きました。また村上裕美氏（京都市立芸術大学）には、本稿作成当初から完成に至るまで、数多くのご意見ご批判を頂き、また資料作成も含め、大変お世話になりました。（本稿の作成にあたっては JSPS KAKENHI Grant Number JP20H03912 の援助を受けています。）

REFERENCES

Badiou, A. (1992): *CONDITIONS*. Editions du Seuil, Paris. (English Translation: *Conditions*, by Steven Corcoran, Continuum Publishing, New York, 2008).

Bhaskar, R. (1997): *A Realist Theory of Science*. Verso Books, London.

Davidson, D. (2001): *Inquiries into Truth and Interpretation* second edn. Clarendon Press, Oxford.

Dilworth, D. A. (1987): *Nishida Kitaro Last Writings: Nothingness and the religious worldview*. University of Hawaii Press, Honolulu.

Durkheim, E. (1955): *Pragmatisme et sociologie*. Cours inédit prononcé à La Sorbonne en 1913-1914 et restitué par Armand Cuvillier d'après, J. Vrin. (English Translation: *Pragmatism and Sociology*, 1983, by J. C. Whitehouse, Cambridge University Press, New York).

---

[37] 畢竟、この背景にあるのは、「素材とそれらに内的なもの」に基礎を置く肯定的な constitution 構成における各「素材」の「制約」と、そういった種々「制約」によって生じる構造が外的な関係を新たに取り結ぶときに起こす接続の複雑化と多様化の差異である。後者が「学知」の豊かさ、ある「特定」の、それゆえに「実際的」であり得る発展の可能性をもたらすのに対して、前者は見られた内的本質に即した普遍性を求める。真の学知は、このことに「遊び」の「避け難い」necessity（あるいは「私」にともなわれた「避け難い 'thrown in' with throwing」）としての、きちんとした分類を与え得るものでなければならない。

Ferraris, M. (2015): “New Realism: a shor introduction,” in *Speculations, VI*, (Gironi, F. ed) , pp. 141–164, Punctum books, New York.

Feyerabend, P. (1975): *Against Method: Outline of an Anarchistic Theory of Knowledge* Third edn. Verso, London.

Freyd, P. J. and Scedrov, A. (1990): *Categories, Allegories*. North-Holland, Amsterdam.

Goldblatt, R. (1979): *Topoi: The Categorial Analysis of Logic*. North-Holland, Amsterdam. (Revised edition, Dover Books on Mathematics, 2006).

Hamkins, J. D. (2012): “The Set-Theoretic Multiverse,” *The Review of Symbolic Logic 5*(3), 416–449.

Hanaoka, E. (2021): *‘Makoto no Hirake’ — ‘Zettai Mu no Basyo’ kara*. Nonburusha Publishing Company, Tokyo. (Published in Japanese, Opening of ‘Loyalty’ — from the ‘Place of Absolute Nothingness’).

Hayek, F. A. (1973): *Law, Legislation and Liberty volume 1: Rules and Order*. Routledge & Kegan Paul, London.

Heidegger, M. (1927): *Sein und Zeit*. In German. (English translation: *Being and Time*, 1962, by John Macquarrie and Edward Robinson, Blackwell, Oxford).

Hui, Y. (2019): *Recursivity and Contingency*. Rowman & Littlefield International, London/New York.

Inoki, T. (2016): *Jiyuu no Shisou Si*. Shinchosha, Tokyo. (Published in Japanese, A History of the Idea of Freedom: Can Markets and Democracy be Defended?).

Kant, I. (1787): *Kritik der reinen Vernunft* Second edn. (English translation: The Critique of Pure Reason, 1933, London).

Kant, I. (1788): *Kritik der praktischen Vernunft*. (English translation: The Critique of Practical Reason, 2002, by Werner S. Pluhar, Hackett Publishing, Indianapolis).

Keynes, J. M. (1936): *The General Theory of Employment, Interest and Money*. Macmillan / Cambridge University Press / Royal Economic Society, United Kingdom.

Kripke, S. A. (1975): “Outline of a theory of truth,” *Journal of Philosophy 72*(19), 690–716.

Kuhn, T. (1962): *The Structure of Scientific Revolutions*. University of Chicago Press, Chicago.

Kunen, K. (1980): *Set Theory: An Introduction to Independence Proofs*. North Holland, Amsterdam.

Lacan, J. (1959): *The Seminar of Jacques Lacan: Book VII*. W.W.Norton, New York. (*The Ethics of Psychoanalysis* 1959-1960: Edited by Jacques-Alain Miller, Translated with notes by Dennis Porter).

Lakatos, I. (1978): *The methodology of scientific research programmes* vol. 1. Cambridge University Press, New York.

Lawson, T. (1997): *Economics and Reality*. Routledge, London.

Levinas, E. (1974): *Autrement qu’être ou au-delà de l’essence*. Dordrecht, Netherlands. (English Translation: *Otherwise than Being or Beyond Essence*, by A. Lingis, 1998, Duquesne University Press, Pittsburgh).

Luhmann, N. (1984): *Soziale Systeme: Grundriβ einer allgemeinen Theorie*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt. (English Translation: *SOCIAL SYSTEMS*, by John

Bednarz, Jr., with Dirk Baecker foreword by Eva M.Knodt, 1995, Stanford University Press, California).

Meillassoux, Q. (2006): *Après la finitude. Essai sur la nécessitè de la contingence*. Seuil, Paris. (English translation: *After Finitude: An Essay On The Necessity Of Contingency*, by Ray Brassier, Continuum, 2008).

Murata, H. (1990): *Jouhou to System no Tetsugaku — Gendai Hihan no Shiten*. Bunshindo Publishing Company, Tokyo. (Published in Japanese, Philosophy of Information and Systems — From the Viewpoint of Critique of Modernity).

Murata, H. (2017): "Bunmei to Keiei sono Tetsugaku teki Tenbou ni Mukete - Keieigaku ni okeru Gutaisei toha Nanika," *Meiji University Keiei Ronsyu 64*(4), 15–43. (Published in Japanese, Civilization and Management, Toward a Philosophical Perspective: What is Concreteness in Management Studies?).

Murata, H. (2023): *Bunmei to Keiei*. Bunshindo Publishing Company, Tokyo. (Published in Japanese, Civilization and Management).

Nishida, K. (1987): "The logic of the place of nothingness and the religious worldview,". Originally published in Japanese, "Basyo teki Ronri to Syukyo teki Sekaikan", as a manuscript included in Nishida's 7th collection of papers, by Iwanami Shoten in Tokyo, in 1946, translated and introduced in *Nishida Kitaro Last Writings*, University of Hawaii Press, by David A. Dilworth.

Nishida, K. (1990): *An Inquiry into the Good*. Yale University Press, New Haven. (Originally published in Japanese, Zen no Kenkyu, by Iwanami Shoten, Publishers in Tokyo, in 1911; translated by Masao Abe and Christopher Ives).

Peirce, C. S. (1878): "How to Make Our Ideas Clear," *Popular Science Monthly 12*, 286–302.

Polanyi, M. and Prosch, H. (1975): *Meaning*. The University of Chicago Press, Chicago.

Putnam, H. (1983): *Realism and Reason* vol. 3 of *Philosophical Papers*. Cambridge University Press, New York.

Putnam, H. (1995): *Pragmatism*. Blackwell, Cambridge.

Putnam, H. (2002): *The Collapse of The Fact/Value Dichotomy and Other Essays*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.

Quine, W. V. O. (1953): *From a Logical Point of View: 9 Logico-Philosophical Essays, Second Edition, Revised 1961*. Harvard University Press.

Quine, W. V. O. (1960): *Word and Object*. M.I.T. Press.

Searle, J. R. (1996): *The Construction of Social Reality*. Penguin Books, London.

Takeuti, G. (1987): *Proof Theory* Second edn. North-Holland, Amsterdam · New York.

Tanaka, Y. (2016): "Zettai Mu no Souzousei to Mujyunteki Jikodouitu — Nishida Tetsugaku kara Rekitei Shingaku he," *Touzai Syukyo Kenkyu 14 · 15*, 77–104. (Published in Japanese, Creativity of Absolute Nothingness and Contradictory Self-Identity — From Nishida's Philosophy to Historical Process Theology).

Taylor, C. (1989): *Sources of the self: the making of the modern identity*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.

Urai, K. (2010): *Fixed Points and Economic Equilibria* vol. 5 of *Series of Mathematical Economics and Game Theory*. World Scientific Publishing Company, New Jersey/London/Singapore.

Urai, K., Katsuragi, M., and Takeuchi, Y. ed (2023): *Realism for Social Sciences*. Springer Nature.

Whitehead, A. N. (1927): *Science and the Modern World*. Cambridge University Press, London. (Lowell Lectures 1925, First English Edition 1926, New Impression 1927, Reprinted 1928, 1929).

Whitehead, A. N. (1929): *Process and Reality* Corrected edn. The Free Press, New York. (Gifford lectures 1927-28, The Free Press 1978, originally published in 1929).